

道徳教育研究会で学びました!

第58回道徳教育研究会は「道徳教育の新たな充実をめざして」をテーマに岐阜県下3会場（東濃会場は中止）において開かれました。もとす教育者道徳研究会は、8月4日（水）羽島市福祉ふれあい会館の岐阜羽島会場へ参加しました。参加者数54名中6名(13%)でした。今回は参加者が少なく、参加費を本会で全額出すことができました。

開会式は、山中校長先生（足近小）の進行で、静かな国歌斉唱後、岐阜県モラロジー協議会：遠藤兵庫会長の開会挨拶、公益財団法人モラロジー道徳教育財団・東海ブロック副部長：伊藤彰彦氏による主催者挨拶がありました。全国各地62会場で開催されていることの紹介と参加者への期待やお礼を述べられました。

また、開催地を代表して羽島市長・松井聡様より歓迎のご挨拶をいただきました。森嘉長教育長様にもご臨席いただきました。



開会挨拶
遠藤兵庫会長



主催者挨拶
伊藤彰彦副部長



歓迎のご挨拶
松井聡羽島市長



司会（足近小）
山中一悦校長

第1講と第2講の間には実践発表があり、**羽島市立中島小学校：宮田祐嗣教諭**が「よりよい生き方を求める道徳教育はどうあるべきか」の発表でした。



第1講「日本 この国のかたち」

麗澤瑞浪中学・高校教諭 高瀬 仁志 先生

現役の教師として、どのような日本の歴史を生徒に伝えていくのか…。そんな高瀬先生の強い思いを知る講義でありました。

この国のかたち 神話の世界を詳しく知る

『古事記』や『日本書紀』をどう伝えるか。高瀬先生は、まず生徒に現実感をもたせる架空

実況放送で迫るそうです。例えば、天岩戸の故事を現地レポーターのように解説してくださいました。そこに現れる人間的な心理や考え方が切実である程、絵空事ではない真実性と面白さを感じることができます。こうして「国のはじまり」を探求させることにより、「この国のかたち」を学んでいくそうです。

天皇の役割と実際の働き

日本国憲法上の天皇に関する条文的解釈をしているだけで良いか。高瀬先生は、より人格的な考察をして「象徴性」を考えさせようと授業を展開されるようです。その役割一つ一つを探求し「国民の幸福と世界の平和」のために「誠心誠意お勤めになる」事例を知らせるのです。先の戦争の慰霊を続けるサイパン島での現上皇様の御歌が紹介されると、そこに「深い祈り」を感じました。皇居勤労奉仕をしている学校の引率者として「御会釈」の場で東日本大震災に遭遇した子の紹介をした際、皇后陛下（現上皇后様）が「よく預かっていただきました」とのお言葉を述べられましたとの体験談には「深い感銘」を受けました。

会場の様子から



講演中の高瀬先生

第2講「戦後日本の来歴と道德教育の未来 ～その課題と展望～」

武蔵野大学教授 貝塚 茂樹 先生

貝塚先生は、役職やその多数の著書名・共著名を見ると、道德教育の良き伴奏者であることが分かります。講演を通じて謙虚で率直なお方であることも知りました。

平成の道德教育・授業から令和の道德科へ

上記の資料を見て、我が歩みを重ねておりました。昭和 33 (1958) 年は小学 2 年生で、図書室の TV でよくお話を視聴していました。昭和 61 (1986) 年に臨教審第二答申が出た頃は、前任校で文部省道德教育研究指定の研究主任を務めたことから岐阜県道德教育研究部会で学び始めた頃でした。平成 14 (2002) 年文部科学省から『心のノート』が出た頃は、道德授業との関わりが事実上無くなってしまった頃でした。『心のノート』が配布停止された平成 23 (2011) 年は、定年退職の年でした。

「考え・議論する」という道德科のキーワード

こうした歴史の中で、平成 30 (2018) 年に小学校、令和元 (2019) 年に中学校が「道德科」全面実施へと進みました。「先行きの不透明な時代にこそ、答えの無い (答えが一つではない) 道德的な課題を追求する思考が大切であり『考え・議論する』ことが必然となります」という貝塚先生のお話に納得したところでもあります。道德教育がめざす資質・能力とは「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道德としての問題を考え続ける姿勢こそ道德教育で養うべき基本的な資質である (中教審答申 2014.10.21)」

一方で、職員研修の参加意欲の停滞、「けだるい」校内研修の空気、ハウ・ツー本の氾濫等、現場に接している貝塚先生なればこそその警鐘を鳴らしておられます。「教科化」以降も「授業のタブー」が存在していることの指摘も傾聴すべきお話と受け止めた次第です。



講演中の貝塚先生

「つながり」という道德科のキーワード

山口良治氏「人間というのは、自分ひとりだけのことにしか見えず、自分の外へ回路を閉ざしてしまうと小さな弱い存在になってしまう。他人のことを自分のことと同じように考えられる、そういう優しさが人間を成長させ、困難な局面に立ったときにそれを乗り越える強さになるのだ」、金森俊朗氏「生きるとは仲間とつながることだ。つながることで自分らしいハッピーを創り出してほしい (中略) 学校では、丹念に、丹念に、『つながる練習』を繰り返すのである」の言葉を引用されながら、道德とは「つながり」と熱く語られました。また、「同調圧力」を例に「つながるとは、『間合い』(距離感)を学ぶことである」と強調されました。

教師こそ主体的な学習者であれ！

「私のものさしで問うのではなく 私のものさしを問うのです」という某大学で見たという碑文の紹介もありました。

「そもそも道德教育は難しい！！だから、考え続けるしかないし、議論し続けるしかない。教師が常に『考え・議論する』道德を実践してほしい。つまり、教師こそが『アクティブ・ラーナー (主体的な学習者)』になっていただきたい」との激励も受けました。

貝塚先生の講義内容も能力的に上手にまとめきれないもどかしさが残ります。時間が許せば、貝塚先生にはもっともっと貴重なお話が聴けそうな雰囲気でした。ぜひ書物でのご探求をお願いします。

閉会式は、岐阜県教育者道德研究会・子安一徳会長より総括をしていただきました。三者の講義内容に触れながら丁寧なお礼を述べられました。また、主体的に学ぼうと参加した先生方の意欲こそ「自らの品性を高め、子どもたちを幸せにするもの」と価値付けてくださいました。

閉会挨拶 子安一徳会長

【文責・森山】

